

学習内容の定着を目指したCD-ROM英語教材の活用 —英語のリメディアル教育への取り組み—

白倉 美里・大崎 さつき

本研究では、学力不足の学生に対して行う英語のリメディアル教育の一環として、英語授業の復習にCD-ROMによる自主学習を導入する実践例を紹介し、その取り組みに対する学生の反応を調査した結果を報告する。ネット環境が整っていない学生を考慮に入れ、今回はCD-ROMによる自主学習を試みた。研究対象となった学生たちは今回の取り組みを通して、中学1年生の文法から復習することができたと感じたことがわかった。このことが、自分の英語力がどの程度であるかを意識するきっかけを与えることにつながったと推察できる。また、本研究で報告した実践例を通して、学生たちに学習方法の一例を示すと共に復習することの大切さを実感してもらうことができた。そして、毎週のように宿題として課されたCD-ROM教材を用いた学習に取り組むことで、自主学習の習慣を身につけさせることができた。学習教材がそろっていれば、リメディアル教育が必要な学習者であっても、自主学習に取り組むことができるということがわかった。本研究から、授業中に学習した内容の定着を目指すために大切なことは授業で学習した内容を授業外の自主学習で復習させることであり、そのための有効な方法の一つが自主学習用CD-ROM教材であるということが示唆できる。

キーワード

リメディアル教育、英語授業の復習、CD-ROM教材

1. はじめに

本論文では大学英語のリメディアル教育におけるCD-ROMの活用法を提案すると共に、実際に著者がその方法を試みた成果を報告する。

リメディアル教育の定義や内容については、様々あるが、本稿では、大学の講義についていけるだけの学力や知識を身につけることを助ける教育とする。つまり、高等学校の教育課程は修了したが、まだ大学教育レベルに達していない学力不足の学生に対して行う教育とする(山本, 1999)。

言い換えれば、リメディアル教育を必要とする学生が抱える問題点は、第一に基礎的な英語力が備わっていないこと、第二に授業で学習した内容を自ら復習する機会がほとんどないために学んだことが定着せずに終わってしまうことである。大学英語教育における「基礎的な英語力」とは、主として学生たちが中学から高校1年生の間に学んだ内容である。中高の6年間の英語教育のどこかでつまづいてしまい、大学で英語を学ぶ際に必要となる基礎力を身につけないままに進学してきた学生は少な

くない。そのような学生たちは、何をどのように勉強すれば良いのかさえわからない状態にある。さらに、授業で基礎的なことを学習する機会があったとしても、学習した内容をしっかりと定着させるための勉強方法もわからない。本研究の出発点は、学生が抱えているこのような問題点を解決することにあった。

このような学習者が基礎から学習するときに、週1回の授業学習だけでは全く足りないのは明白であろう。そこで、学生が基礎となる文法問題などを繰り返し練習できるように、授業内容の復習としてCD-ROM学習を実施することとした。CD-ROMを復習の教材として採用した理由は、主に以下の2つである：(1)ネット環境が整っていない学習者に対する配慮、(2)定着を目指すため、多くの問題数を、定期的に解答させるためであった。印刷教材では、1週間に手渡す量が、膨大になってしまう。また、印刷教材であれば、途中で投げ出すことも考えられるが、CD-ROM教材であれば、「ヘルプ」機能で「文法のヒント」や「日本語訳」などを与えることでサポートでき、途中であきらめる可能性が少ないと考えた。また、学習履歴が残り、教員が学生の学習進度や理解度の把握を簡単に行えることも採用の理由のひとつであった。

2. 研究の目的

本論文では、大学におけるリメディアル教育の実践例の一つとして、「授業学習とCD-ROMを用いた復習の連携を目指した授業形態」の紹介とその成果を報告する。研究対象とした学生数が少ないことと、英語力にばらつきが見られたことから、本研究では研究成果の一般化を目指すのではなく、できるだけ細かく具体的に結果を記述することで、教育的示唆に富んだ内容になることを目指す。また、同じ教材を使用した他大学のアンケート結果から、この実践例の成果を確認することとした。

以下のセクションでは、使用したリメディアル教材の特徴、研究対象となった大学生の特徴、指導実践、調査・分析方法、分析結果、教育的示唆の順に論じる。

3. 使用した教材の特徴

本論文で報告する授業実践は、リメディアル教材『English Quest (小野 2006a, b, 2008)』を使用したものである。この教材は英語を得意としない学生に対して、中学・高校で学習した文法項目の復習の機会を与えると共に、自主学習の習慣化を通して、学習時間を増やすことを目的としており、Intro (入門編)、Basic (基礎編)、Plus (中級編)の3種類がある。すべてのレベルに共通する特徴は以下の4点である。

- (1) 中学・高校で学んだ(が身につけていない)文法項目を復習できるように、各ユニットにターゲットの文法項目が設けられている。
- (2) 付属のCD-ROMを使って復習を中心とした自主学習ができる。
- (3) 繰り返し学習する機会を与えるために、教科書の各ユニットではターゲットとなる文法項目が、「導入の会話」「リーディング」「リスニング」のそれぞれのパートに繰り返し出てくる。また、CD-ROMでも、各ユニットが3日分で構成されていて、類似問題を繰り返して学習できる仕組みになっている。
- (4) 興味・関心を持って学習できるように、登場人物はすべて大学生で、授業や部活動、バイト、恋愛などのような身近な話題を扱っている。

4. 対象とした学生の特徴

対象とした学生はIntro使用クラス30人(大崎担当, 以下Introクラス)、Basic使用クラス25人(白倉担当, 以下Basicクラス)で、いずれも英語専攻ではなかった。これらのクラスとは別に、English Quest Introを採用した関東地区にある他大学の学生にアンケート調査を依頼

した。被験者数は授業を受講した2クラス、計50人であり、こちらも英語専攻ではなかった。全4クラスともに全体としてみると、英検3級程度のレベルであった。筆者が担当したIntroクラスとBasicクラスについては、担当者の実感としては、様々なレベルの学生が混在しているクラスであると言える。学生の英作文に頻繁に見られる誤りとしては“I am going to tennis.” “I am like soccer.” “I enjoying basketball.”などが挙げられる。一般動詞とbe動詞の混同、準動詞の誤用、後置修飾の概念を理解できていないなど、中学校で学習した基礎レベルの英語が定着していない学習者がほとんどで、授業外の英語学習の習慣化もされていない状態であった。

学生たちのほとんどが英語に対する苦手意識を持っているものの、英語を話せるようにはなりたいと感じているようであった。どのように自分自身で英語を勉強すれば良いかがわからないと言う学生が多かったが、教師に指示されたことには真面目に取り組む姿勢を示していた。授業を通して達成感や自信を持たせることで伸びる学生が多いのではないかと感じた。

5. 指導実践

筆者担当のクラスでは、前述したような学生を対象に授業を行うにあたり、大雑把ではあるが、2つの目標を立てた。

- (1) 英語学習につまずいている学習者の多くは、「何がわからないかさえわからない」状態にある。教科書を使って中学校の最初に習った文法事項から順番に復習していくことにより、自分がどこでつまづいているのかを自覚させる。
- (2) 学生に少しでも英語力をつけさせるためには、授業外での学習時間を確保する必要がある。ただ単に「勉強しなさい」と言うだけでは、学生は勉強しない。「どのように、何を勉強すればよいかかわからない」からである。そこで、教科書に付属のCD-ROMを使った自主学習を導入して英語の勉強方法の一例を示し、授業外での自主学習の習慣を確立させる。

以上の目標のもと、実際の授業ではパワーポイントを使って新出単語をフラッシュカードと同じ要領で学習させたり、教科書に出てきたダイアログを暗記させてペアで発表する機会を与えたりするなど、学生にとって努力すれば必ず出来る活動を中心に進めていった。また、教科書で学んだ表現を使って自分自身の体験などを英語で書いたり話したりする機会を与えることで、学んだ英語表現を実際に使ってコミュニケーションする体験をさせるようにした。これらの実践例はすべて学生たちに興味と意欲を持って取り組んでもらうための工夫である。また、英語が苦手な自分にもできるという自信を持たせ

るために、活動の難易度を調整しながら進めていった。

授業外の学習時間を確保するために、学生たちには各ユニットが終了した後に付属のCD-ROMを使った自主学習を宿題として課した。CD-ROMには1つのユニットについて3日分の練習問題が含まれていて、正答率が「成績表」として保存される仕組みになっている。学生たちにはこの成績表をプリントアウトして提出するように指示した。CD-ROMによる学習はあくまでも復習の機会を与えるためのものであって、正答率の高低を評価するためのものではないことを伝えた。

半年の授業期間が終了した時点でのCD-ROM宿題提出回数は、大崎が担当したIntroクラスでは7回、白倉が担当したBasicクラスでは3回だった。分析結果のセクションで詳しく述べるが、この回数の違いが学生のCD-ROMに対する反応に影響を与えたようである。

アンケート調査を依頼した他大学では、筆者とは別の担当者がその大学の学生のレベルや進度などに応じて、指導を実施した。

6. 調査・分析方法

著者担当のクラスで、前述した授業を半年間行なった結果、学生の意識や学習状態にどのような変化が見られたかを調べるために、アンケート調査を行なった。以下にアンケートの内容と分析手順を記す。

アンケートは、(1)教科書についての質問、(2)白倉・大崎が行った授業内の活動についての質問、(3)CD-ROMについての質問、の3部構成になっている。教科書についてのセクションでは、主として教材の難易度や扱われているトピックについて質問した。CD-ROMのセクションでは、自宅学習への取り組みについてと、CD-ROMが学習方法のヒントになったかを尋ねた。回答形式は一部記述形式もあるが、多くは5件法によるものだった。詳しくは本論文の付録を参照されたい。

また、アンケート結果の分析の観点と方法は以下の通りである。

(1) 学習全般に対する学生の反応（教科書、CD-ROM）

各アンケート項目の平均値と標準偏差を筆者が主観的に評価した。5件法で得られたデータは厳密には順序尺度のデータであるが、今回は便宜上これを間隔尺度としてとらえ、記述統計量を項目間で比較した。比較に際しても、本来であれば統計的な分析のように客観的な手法を用いるべきところであるが、データ数が少ないことと、本研究の目的が分析結果の一般化というよりは実践報告の色合いが濃いということから、筆者2名による主観的分析にとどめた。

(2) 教科書とCD-ROMの学習内容の連携に対する学生の反応

前述したように、本研究で使用した教材『English

Quest』は、授業中に教科書で学習した内容を、授業外でCD-ROMを使って復習するという仕組みになっている。つまり、学生たちが授業内外での学習を通してこれまでに学習した内容の再確認と復習ができることを目的に作成されている。本調査では、実際に学生たちが教科書とCD-ROMを使用したことで、これまでに学習した内容の再確認と復習に役に立ったかを調べるため、この点について質問をしている項目をそれぞれ教科書についての質問項目とCD-ROMについての質問項目から抽出し、それらに対する学生の回答が同様の傾向を示しているかを調べた。学生の回答をクラス毎にクロス集計表にまとめ、フィッシャーの直接確率法を用いて関係性を検証した。また、副次的にスピアマンの相関係数を用いた分析も行なった。さらに、IntroクラスとBasicクラスの回答を円グラフで示し、クラス内で比較することで、学生たちの回答に影響を与えた原因を探った。統計処理には統計処理ソフトSPSS 13.0Jを使用した。

(3) CD-ROMへの取り組みについての学生の意見

筆者が用意した質問項目以外にも、学生たちの自由な意見を聞くために、アンケート内に自由記述で回答する質問項目を用意した。本研究で調査対象とした、CD-ROMを用いた授業外学習の成果をさらに分析するために、この自由記述による回答傾向をまとめ、考察した。

アンケートには、これまでに述べた項目以外にも筆者2名（白倉・大崎）が授業内に行った活動についての質問が含まれているが、本論文の目的であるCD-ROM学習について焦点をあてるため、この部分については分析対象外とした。

同じくアンケート調査を依頼した他大学では、前期・後期とIntroを使用し、全ユニットと全CD-ROM問題を終了していたため上記の2クラスとは別に分析をした。しかし、同じアンケートを実施し、結果については、学生の全般的な反応を見るため、(1)と(3)について同様に分析した。本論文では他大学のアンケート結果はまとめて最後に報告する。

7. 分析結果

先に述べた調査・分析方法に則った順番で、以下に分析結果を報告する。今回アンケート調査に参加した学生数はIntroクラス（大崎担当）が男子学生27名、女子学生2名の計29名で、Basicクラス（白倉担当）が男子学生19名、女子学生6名の計25名だった。

7.1 学習全般に対する学生の反応

このセクションでは、教科書の内容に関するアンケート項目と、CD-ROMの内容に関するアンケート項目への回答結果の分析結果を報告する。

(1) 教科書の内容に対する反応

表1は、教科書の内容について尋ねたアンケート項目に対する回答結果をまとめたものである。

教科書で扱われていたトピックについてはIntro, Basicどちらのクラスの学生も興味関心を持てるものであったことがわかる(表1 Q1)。また文法説明や練習問題が簡単でわかりやすいものであったため、基礎を復習するのに役立つようである(表1 Q2)。リメディアル教育を必要としている学生にとって、自分が苦手としていることが何であるかを認識することが学習の第一歩となる。今回、リメディアル教材を使用した授業を通して学生たちは中高で学習した内容を復習することができたようである。

自分が苦手とする文法項目がわかった後はそれを克服するための練習が必要となる。教科書内には文法練習問題が掲載されていたが、その難易度について尋ねたところ、英作文問題が難しく感じられたようである(表1 Q3, 自由記述)。この英作文問題は、直前にある並べ替え問題の類似問題なのだが、使用している語彙が変わると、まったく別の文であるように思ってしまう学生がいたのではないかと。並べ替え問題から英作文問題への橋渡しが必要かもしれない。

(2) CD-ROMに対する反応

表2は、CD-ROMの内容について尋ねたアンケート項目への回答結果をまとめたものである。

授業中に学習した内容を付属のCD-ROMを使って復習する試みに対する学生の反応は、IntroクラスもBasicクラスも悪くはなかった(表2 Q7)。Introクラスの方がより興味を持ってCD-ROMに取り組んだようであったが、Basicクラスも回数を重ねていけばCD-ROMに慣れてIntroクラスと同様の反応を示したのではないかとと思われる。また、Basicクラスの学生の中には、CD-ROMの2日目、3日目の問題が難しかったというコメントをした者がいた。語彙のヒントなどがあれば、より積極的にCD-ROMに取り組んだかもしれない。すべての学生にとって適切な難易度のCD-ROMを提供することは難しいかもしれないが、ヒントの量や質を学生自身が選択して学習に取り組めるような仕組みがあれば、それぞれのレベルに合わせた自主学習環境を提供できると考えられる。

CD-ROMを使った自主学習を通して中学校・高校で学習した文法事項を復習することができたかを尋ねたところ、Introクラスの方がBasicクラスよりも、「より役立った」と感じているようであった(表2 Q8)。これもCD-ROMの実施回数の差によるものではないだろうか。IntroクラスはUnit 7まで進んだが、BasicクラスはUnit 4までしか進まなかった。

CD-ROMを使った自主学習を通して、自分の英語習熟度について知ることができたかを尋ねたところ、Intro

表1 教科書の内容についての回答結果 [平均値(SD)]

質問項目	Intro	Basic
(Q1) トピックは興味を持てるものだった	3.80 (0.77)	3.80 (0.50)
(Q2) 文法項目の復習に役立った	3.96 (0.93)	3.76 (0.60)
(Q3) 文法問題は難しかった	2.88 (1.14)	3.12 (0.44)
(Q4) 単語は難しかった	2.69 (0.90)	3.12 (0.78)
(Q5) リスニング問題は難しかった	2.81 (0.99)	3.00 (0.82)
(Q6) リーディング問題は難しかった	2.96 (0.89)	3.44 (0.58)

表2 CD-ROMの内容についての回答結果 [平均値(SD)]

質問項目	Intro	Basic
(Q7) CD-ROMは興味を持てる学習方法だった	3.69 (1.01)	2.88 (1.01)
(Q8) 中学・高校の復習になった	4.19 (0.52)	3.52 (0.82)
(Q9) 自分の文法理解度を知ることができた	3.62 (0.99)	3.60 (1.04)
(Q10) 英語を使うことに慣れた	3.46 (0.86)	3.04 (0.89)
(Q11) 他の自主学習ソフトも使ってみたい	3.77 (1.12)	2.60 (1.08)
(Q12) CD-ROMを通して英語の学習方法がわかった	3.85 (0.75)	3.20 (1.00)

クラスもBasicクラスも同じような反応だった(表2 Q9)。ユニットごとにターゲットとなる文法項目が決まっているので、学生たちは理解不足の文法項目を知ることができたようである。今回の研究ではCD-ROM学習を通して理解不足の項目を学生自身が復習して克服することを目標としたが、その点については十分とは言えず課題が残った。

CD-ROMを導入した目的の一つに、授業外にも英語を学習する機会を与えることで、学生たちが英語を使う時間を増やすということが挙げられていた。CD-ROMを使った自主学習を通して、英語を使うこと(読むこと、書くこと、聞くこと)に慣れたかを尋ねたところ、CD-ROMに取り組んだ回数が多かったIntroクラスでは肯定的な反応が見られた(表2 Q10)。

今回の研究ではCD-ROMの導入を通して学生たちに英語の学習方法の一例を示すことを目指した。リメディアル教育を必要としている学生の多くはどのようにして勉強したらいいかわからない状態にある。今回の研究で導入したCD-ROMは、そのような学生たちに自分自身で取

り組める学習方法を提示する機会となった。今回のような自主学習の体験が、英語の勉強方法のヒントになったかを尋ねたところ、Introクラス、Basicクラスの両方で「4（そう思う）」か「3（どちらでもない）」と回答した学生が多かった。Introクラスの方がBasicクラスよりも若干反応が良かったが、これもやはり回数の差によるものなのであろう。この結果は、少なくともCD-ROMを用いた自主学習が「役に立たない」と感じた学生はいなかったということを示している。今回の結果からCD-ROMがベストな方法であるとまでは結論づけられないが、リメディアル教育を成功に導く有効的な選択肢の一つであると言えよう。

7.2 教科書とCD-ROMの学習内容の連携に対する学生の反応

今回の研究で使用したリメディアル教材は、学生たちが授業内外の学習を通してこれまでに学習した内容の再確認と復習を行うことを目指して作られたものだった。アンケートの質問項目の中でこの点について尋ねている2問に対する学生の回答を比較した。比較対象とした質問はQ2（教科書には基本的な文法事項についての説明や練習問題がありました。あなたにとって文法事項の再確認や勉強の役に立ったと思いますか？）とQ8（CD-ROMを使った自主学習を通して、あなたは中学校・高校で学習した文法事項を復習することができたと思いますか？）である。学生たちが教科書とCD-ROMの両方を同様に有効的なものだと感じたかどうかを調べるために、2つの質問に対する回答をクラス毎に以下のようなクロス集計表にまとめた。その上で、2つの質問の回答傾向に関係性があるかを、フィッシャーの直接確率法を用いて検証した。セル内の数字は人数を表している。

表3 Q2とQ8への回答分布 (Introクラス)

Q2 \ Q8	5	4	3	2	1
5	5	3	0	0	0
4	1	14	1	0	0
3	0	2	1	0	0
2	0	2	0	0	0
1	0	1	0	0	0

表4 Q2とQ8への回答分布 (Basicクラス)

Q2 \ Q8	5	4	3	2	1
5	1	0	1	0	0
4	0	10	3	1	1
3	0	4	4	0	0
2	0	0	0	0	0
1	0	0	0	0	0

検定の結果、IntroクラスではQ2とQ8の回答傾向には何らかの関係があると言えることがわかった ($p=0.036$)。どのような関係性があるかはクロス集計表を主観的に読み取ることでしか説明できないが、Q2とQ8の両方に「4＝そう思う」と回答した学生が29人中14人(48%)いたことから、教科書とCD-ROMの内容の類似性を少なくとも半数程度の学生たちは感じとっているのではないだろうか。一方、BasicクラスではQ2とQ8の回答傾向には有意な関係は見られなかった ($p=.141$)。

クロス集計表の分析から得られた結果を補足的に調べるために、Q2とQ8の回答傾向の関係性の指標として相関係数(スピアマンの r)を算出した。相関係数が高ければ教科書とCD-ROMの連携学習に対する肯定的な反応として捉えることができると考えた。結果は、IntroクラスでもBasicクラスでも5%の有意水準では有意な相関関係は見られなかった(Introクラス $N=29, r=.210, p=.274$ / Basicクラス $N=25, r=.082, p=.696$)。

最後に、Q2とQ8の回答分布を円グラフにまとめ、比較考察した。まずIntroクラスとBasicクラスのQ2、Q8に対する回答を別々にグラフにまとめた(図1～図4)。

図1と図2を比較すると、Introクラスでは教科書と比べてCD-ROMの方が復習に役立ったと感じている学生の割合が多いことがわかる。これに対して、図3と図4を比較すると、Basicクラスでは若干ではあるが教科書の方が復習に役立ったと感じた学生の割合が多かった。

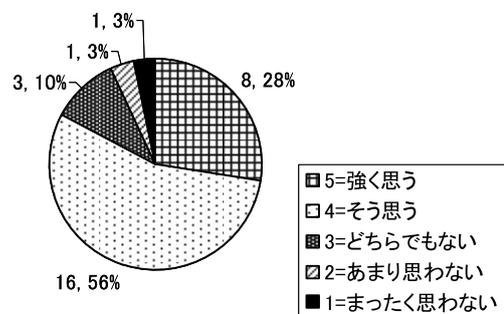


図1 Introクラス Q2への回答
(※図内の数字は人数と%を示している。)

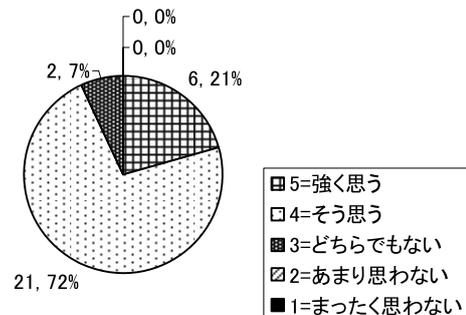


図2 Introクラス Q8への回答
(※図内の数字は人数と%を示している。)

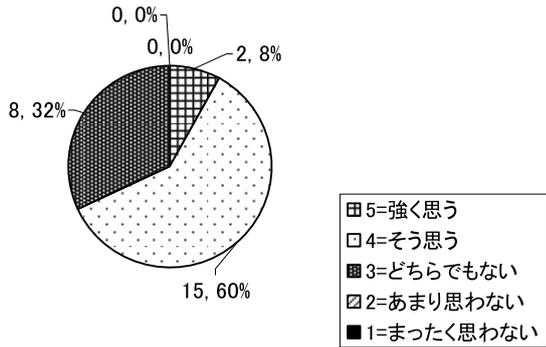


図3 Basicクラス Q2への回答
(※図内の数字は人数と%を示している。)

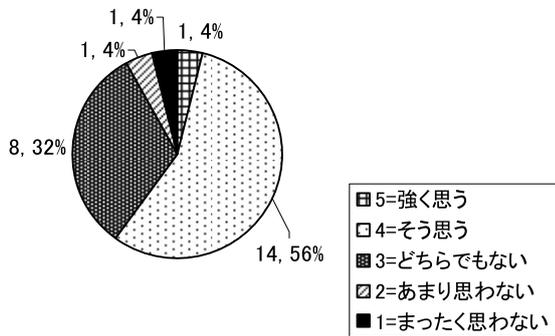


図4 Basicクラス Q8への回答
(※図内の数字は人数と%を示している。)

図1と図3、図2と図4を比べると、教科書についても、CD-ROMについても、Introクラスの方が、復習に役立ったという学生の割合が高かった。このような回答傾向の違いは、一つには教科書の難易度の違いによるものであろう。Basicクラスの方が教科書の難度がやや高かったため、使用した学生にとっては復習するというよりは新しいことを学ぶ機会が多くなっていったのではないだろうか。もう一つには、CD-ROMの実施回数が挙げられるだろう。Introクラスは学期中にCD-ROMの宿題を7回実施したのに対してBasicクラスでは3回のみの実施にとどまった。CD-ROMによる自主学習の効果を実感するにはある程度継続して学習に取り組まなければならないようである。継続して学習を進めていくうちに、自分が苦手としている項目の理解が深まり、自信や達成感を得られるようになるのであろう。

ここまで示した、クロス集計表を用いた分析・相関係数を用いた分析・回答分布を記述的に比較する分析の3種類の結果をまとめると、教科書を使用した授業内の学習とCD-ROMを使用した自主学習の内容について、学生たちは担当教員が期待するほどまでは関連性を実感していないことがわかった。しかし、CD-ROMを用いた授業外学習の回数を重ねることで、学生の意識が変化する可能性が感じられた。

7.3 CD-ROMへの取り組みについての学生の意見

アンケート内には記述による回答を求めた質問項目がいくつかあった。その内容はCD-ROMによる自主学習にかけた学習時間について、CD-ROMに取り入れてほしいコンテンツ、そして今回取り組んだCD-ROMを用いた自主学習の良い点と改善すべき点、の3つである。以下に質問内容と結果を示し、考察を加える。

まずCD-ROMの宿題を終わらせるのに平均どのくらいの時間をかけたかを尋ねたところ、Introクラスでは約半数(回答者29名中15名)の学生が3日分を1日で終わらせたと回答し、Basicクラスでも同様の回答傾向が見られた(回答者25名中14名)。本研究で実施したCD-ROMの目的は、授業外に継続的に(最低でも週に3日間)英語学習を行う機会を提供することである。担当者の希望としては、3日分を3日間にわけて学習してほしいのだが、実際の学生の反応を見てみると、まとめてやったという学生が目立った。毎日こつこつ学習する習慣をつけさせるためには、宿題のネット配信を活用する方法が考えられる。ネット配信についてはこれから取り組むことになったが、大学および学生のPC環境が問題となるであろう。

次に、どのような内容を自主学習ソフトに取り入れてほしいかと尋ねたところ、Introクラスは単語の発音やつづりに関心があるようであった。これは、授業内に行ったパワーポイントを用いた単語練習の成果によるものと思われる。両方のクラスに共通して見られた回答が、「会話練習」と「ゲーム性の高い練習問題」だった。やはり実際に英語を使ってみることに興味関心があるようであった。また、CD-ROMのようなコンピュータを使った学習であれば、学生が求めているようなゲーム性の高い練習問題を取り入れることが可能であろう。単に楽しいだけで実力がつかないソフトでは意味がないが、英語に対して苦手意識を持っている学生に、自主学習の習慣を身につけさせるきっかけ作りとして、ゲーム性の高い練習問題を取り入れても良いのではないだろうか。

最後に、今回CD-ROMを使って自主学習をしてみて良かったと思う点と改善すべき点を挙げてもらった。両方のクラスに共通して見られたのは「意外とおもしろかった」というコメントだった。その他、Introクラスでは「自分が理解不足の点が浮き彫りになった」という記述が見られ、Basicクラスでは「習慣づけて学習しようと思えるようになった」というコメントが見られた。

今回使用したCD-ROMのソフトについてのコメントでは、改善すべき点としてIntroクラスでは「英作文問題の正解が1パターンだけだったが、他の表現でも正解になるようにしてほしい」「学習者のレベルに合わせて問題の出題順や難易度を調整してほしい」という回答があり、Basicクラスでは「ヒントがもっとほしい」というコメントがあった。今回の実践から、個別学習を可能

にするCD-ROMのシステムであっても、学生一人ひとりのレベルに合った教材を提供するのは難しいということがわかった。学生がより意欲的に自主学習に取り組めるように、問題の難度を示して学生自身が問題を選択しながら勉強できる教材システムを導入する必要がある。

7.4 他大学の学生の反応

『English Quest』は現在までに約190大学で採用されている。そのうちの1つである関東地区にある私立大学に同アンケートの実施を依頼した。ここでは、他大学でも同じ教材を利用することで、上記と類似した結果が得られるかを調査した。対象としたクラスは英語専攻ではない2クラス。前期・後期でIntroの全ユニット・全CD-ROM問題を終えた。学生の英語レベルは、著者の学生同様、リメディアル教育を必要とする英検3級レベル相当あるいはそれ以下であった。

以下の表5、表6にアンケート結果を示す。

まず、教科書については、特に文法説明や練習問題が基礎を復習するのに概ね役立ったという結果であった(表5 Q2)。これは白倉・大崎が授業を実施したアンケートの結果と同様、学生たちがこの教科書を使用することで、中highで学習した内容を復習することに比較的役立ったと感じたことを示している。

この他に特徴的な結果としては、単語や文法問題に比べてリーディング問題がやや難しく感じたようである。(表5 Q3-Q6)。この理由の一つとして応用力の欠如が挙げられる。学生たちはターゲットとなっている単語を覚えることや、あるいはターゲットとなっている文法事項が示されている状況では文法問題に正解することはできる。しかし、リーディングでは情報を総合的に理解する力が必要になる。つまり、学習したことを応用する力が不可欠であるが、リメディアル教育を必要とする学生たちにはそのような力が不十分である。基礎力を身につけていくと共に、基礎知識を応用できる力を身につけていくことが今後の課題となるであろう。

次に、授業中に学習した内容を付属のCD-ROMを使って復習する試みに対する学生の反応であるが、概ねよかったといえる(表6)。

CD-ROMを使った自主学習を通して中学校・高校で学習した文法事項を復習することができたかを尋ねたところ、「役立った」と感じているようであった(表6 Q8)。

また、CD-ROMを使った自主学習を通して、自分の英語習熟度について知ることができたかを尋ねた項目においても、自分の理解度を知るきっかけとなったようである。(表6 Q9)。

今回のような自主学習の体験が、英語の勉強方法のヒントになったかを尋ねた項目では、著者の学生たちの反応と同じく、「4(そう思う)」か「3(どちらでもない)」

表5 教科書の内容についての回答結果 [平均値(SD)]

質問項目	Intro
(Q1)トピックは興味を持てるものだった	3.14 (0.85)
(Q2)文法項目の復習に役立った	3.62 (0.95)
(Q3)文法問題は難しかった	2.86 (0.89)
(Q4)単語は難しかった	2.97 (0.92)
(Q5)リスニング問題は難しかった	2.90 (0.79)
(Q6)リーディング問題は難しかった	3.34 (0.96)

表6 CD-ROMの内容についての回答結果 [平均値(SD)]

質問項目	Intro
(Q7)CD-ROMは興味を持てる学習方法だった	3.24 (0.97)
(Q8)中学・高校の復習になった	3.63 (0.91)
(Q9)自分の文法理解度を知ることができた	3.64 (0.90)
(Q10)英語を使うことに慣れた	3.10 (0.90)
(Q11)他の自主学習ソフトも使ってみたい	3.33 (1.01)
(Q12)CD-ROMを通して英語の学習方法がわかった	3.44 (0.79)

と回答した学生が多かった。CD-ROMを用いた自主学習が「役に立たない」と感じた学生はいなかったということがここでも示された(表6 Q12)。

次に自由記述に見られた学生の反応を示す。学生の中には実際に新出単語をノートに書かないと覚えられないとするものもいたが、概ね好意的な意見が多かった。例えば、「おもしろく学習できた」、「自分のペースでできるのがよかった」、「何回も繰り返し勉強できてよかった」、「本だけでやるよりよい」、「気軽にできるのがよい」などであった。このようなCD-ROMに対する好意的な態度は、CD-ROMによる復習の効果を促進させるのに大いに役立つのではないだろうか。このように他大学においても著者が担当したクラスと概ね類似した反応であることがわかった。

8. 教育的示唆と今後の課題

本研究では、リメディアル教育の一環として、授業の復習にCD-ROMによる自主学習を導入する実践例を紹介

介し、その取り組みに対する学生の反応を記述した。

研究対象となった学生たちは今回の取り組みを通して、中学1年生の文法から復習することができたので、自分がつまずいているのはどこか、何がわかっていないからつまずいているかに気づくことができたと言える。これは、自分の英語力がどの程度であることを意識するきっかけを与えることにつながり、その結果として学生たちは「つまずきの原因」を自覚することができた。今回の研究を通して、このような学習を継続して行くことで、さらに学習を促進する可能性が感じられた。

今回対象とした学生の中には、「CD-ROMの使用を通して、英語の学習方法がわかった気がする」と言う者もいた。リメディアル教育を必要とする学生の多くは「どうやって勉強すれば良いかわからない」状態にある。本研究で報告したCD-ROMを使用した自主学習を通して、学生たちに学習方法の一例を示すと共に復習することの大切さを実感してもらうことができた。また、毎週のように宿題として課されたCD-ROMに取り組むことで、自主学習の習慣を身につけさせることができた。宿題がなくなれば、自主学習の習慣がなくなってしまう可能性もあるが学習教材がそろっていれば、今回対象としたような英語力が高くない学習者であっても、自主学習に取り組むことができるということがわかった。

最後に、本研究の一番の示唆は、授業で学習した内容の定着を目指すためには授業外の自主学習で復習させる機会を作ることが大切であり、そのために有効な方法の一つとしてCD-ROMが挙げられるということである。CD-ROMを通して学生たちは繰り返し学習する機会だけでなく、学習した内容を自ら使用する機会を与えられることにもなる。自主学習を通してあらためて定着が不十分な項目を知ることができ、それをその場で練習してさらに復習することができる。

今後の課題としては、自主学習を「毎日継続的に」させるための工夫が必要とされる。苦手な点を克服するには、1週間に1回の学習ではなく、毎日学習することが必要である。教材に工夫を加えることで、より有意義な自主学習の習慣化を目指すことが求められる。

付 録

アンケート^{1),2)}

このアンケートは、授業担当者が今後の授業運営の参考にするためのものです。成績には一切関係ありませんので、みなさんの率直な意見を聞かせてください。回答するときは、あなたの考えにもっとも近いと思うものを○で囲んでください。また、自由記述欄には、ぜひ皆さんの感想・コメントを書いてください。

■教科書についての質問です。

- ① 教科書で取り扱われていた題材（大学生生活など）は、あなたにとっておもしろいもの・興味を持って取り組めるものでしたか？
- 5 強く思う 4 そう思う
3 どちらでもない 2 あまり思わない
1 まったく思わない
- ② 教科書には基本的な文法事項についての説明や練習問題がありました。あなたにとって文法事項の再確認や勉強の役に立ったと思いますか？
- 5 強く思う 4 そう思う
3 どちらでもない 2 あまり思わない
1 まったく思わない
- ③ 教科書にのっていた文法練習問題の難易度はどうでしたか？
- 5 難しすぎた 4 やや難しかった
3 どちらでもない 2 やや簡単だった
1 簡単すぎた
- ④ 教科書全体を振り返って、使われていた単語の難易度はどうでしたか？
- 5 わからない単語ばかりだった
4 わからない単語が多いと感じた
3 どちらでもない
2 知っている単語が多いと感じた
1 知っている単語ばかりだった
- ⑤ リスニング問題（各Unitの最初のダイアログ（会話）と、後半のリスニング問題）の難易度はどうでしたか？
- 5 難しすぎた 4 やや難しかった
3 どちらでもない 2 やや簡単だった
1 簡単すぎた
- ⑥ リーディング問題（各Unitの後半にでてきた文章問題）の難易度はどうでしたか？
- 5 難しすぎた 4 やや難しかった
3 どちらでもない 2 やや簡単だった
1 簡単すぎた

■e-Learningについての質問です。

- ⑦ e-Learningを使った自主学習は、あなたにとっておもしろいもの・興味を持って取り組めるものでしたか？
- 5 強く思う 4 そう思う
3 どちらでもない 2 あまり思わない
1 まったく思わない

- ⑧ e-Learningを使った自主学習を通して、あなたは中学校・高校で学習した文法事項を復習することができたと思いますか？
- 5 強く思う 4 そう思う
3 どちらでもない 2 あまり思わない
1 まったく思わない
- ⑨ e-Learningを使った自主学習を通して、あなたは自分の文法理解度や、自分の得意あるいは苦手な項目を知ることができたと思いますか？
- 5 強く思う 4 そう思う
3 どちらでもない 2 あまり思わない
1 まったく思わない
- ⑩ e-Learningを使った自主学習を通して、あなたは英語を使うこと（読むこと、書くこと、聞くこと）に慣れたと思いますか？
- 5 強く思う 4 そう思う
3 どちらでもない 2 あまり思わない
1 まったく思わない
- ⑪ 他にもこのような自主学習ソフトがあったら、使ってみてみたいと思いますか？
- 5 強く思う 4 そう思う
3 どちらでもない 2 あまり思わない
1 まったく思わない
- ⑫ 今回のような自主学習の体験は、あなたにとって英語の勉強方法のヒントになったと思いますか？
- 5 強く思う 4 そう思う
3 どちらでもない 2 あまり思わない
1 まったく思わない

その他、授業担当者へのコメントなどありましたら書いてください。

ご協力ありがとうございました。

謝辞

本研究のアンケート調査にご協力いただいた、他大学の先生に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

また、本論文の審査の過程で査読員の方々から貴重なご意見を頂きましたことに対しても、この場を借りて御礼申し上げます。

注

- 1) アンケート内で「e-Learning」と表記してある部分は、CD-ROMを用いた自主学習を意味している。実際の授業ではCD-ROMを使った自主学習のことを「e-Learning」と呼んで学生に周知していたため、アンケート内でもこのような表記になっている。
- 2) 実際に実施したアンケートには、付録に掲載した内容に加えて、IntroクラスとBasicクラスそれぞれの授業で行なった具体的な活動についての質問が含まれていた。本研究とは直接関係ない項目のため、ここでは割愛した。

引用文献

- 小野 博（監修）（2008）. 『English Quest (Plus)』 桐原書店.
小野 博（監修）（2006a）. 『English Quest (Intro)』 桐原書店.
小野 博（監修）（2006b）. 『English Quest (Basic)』 桐原書店.
山本以和子（1999）. 『日本の大学が捉えているリメディアル教育とは？』 ベネッセ教育総研, 1999年11月
<http://benesse.jp/berd/center/open/report/kyoikukaikaku/2000/kaisetu/nihon_remedial.html>（2008年5月7日）.



臼倉 美瑠

2000年3月昭和女子大学を卒業後、都立高校に5年間勤める。2008年3月東京学芸大学連合大学院学校教育学研究科修了（博士（教育学））。現職は千葉商科大学、東京学芸大学、東京女子大学で非常勤講師。専門は英語教育。全国英語教育学会、大学英語教育学会、日本リメディアル教育学会、英語授業研究学会、各会員。



大崎 さつき

2001年英国ブライトン大学大学院教育学部メディア英語教育学修士課程修了。2002年ー2005年東京電機大学工学部英語系列英語インストラクター、2005年千葉大学、千葉商科大学各非常勤講師（各現在に至る）、2006年中央大学兼任講師（現在に至る）、2008年創価大学非常勤講師（現在に至る）。専門は英語教育、リメディアル教育、読解における電子辞書使用研究など。全国英語教育学会、外国語教育メディア学会、大学英語教育学会、日本リメディアル教育学会、各会員。

An Effective Way of Using Self-Learning CD-ROM Materials outside the Classroom —An Attempt in Developmental English Education for University Students—

Misato Usukura · Satsuki Osaki

The aim of this study is to show an effective way to use the self-learning CD-ROM materials outside the classroom for providing developmental English education to university students. A questionnaire survey was conducted to find how effectively students had learned English through the CD-ROM materials outside the classroom. The results of the survey show that reviewing lessons with the CD-ROM materials has provided the students with clear understanding of basic grammar. Furthermore, the use of the CD-ROM materials demonstrated students a way of studying English outside the classroom, and they seemed to find reviewing a lesson that covered in the classroom important in the process of learning. Finally, the students seemed to have developed a habit of reviewing outside the classroom using the CD-ROM materials. These findings suggest that assigning students to go through self-learning CD-ROM materials is one of the effective ways of providing learning opportunities in developmental education.

Keywords

developmental education, English learning outside the classroom, CD-ROM as a self-learning tool